

佐藤勝明氏博士（文学）学位請求論文審査報告
論文名「京都俳壇と蕉風の胎動 延宝・天和期俳諧の研究」

本論文は、延宝・天和期（1673～1684）を俳諧における大きな変革にあたると考えそこに焦点をあてて、京都俳壇の動向と江戸俳壇（主として蕉風の俳諧）の動向の二方向から、両者のそれぞれの問題及び関連する問題を追及したもので、第 部京都俳壇篇と第 部芭蕉俳諧篇の二つの部分から成り、また第 部として参考資料篇を付している。

第 部は7章から成り、第1章は世代交代の進む延宝期京都俳壇の様相を概観する。ここでは新進の談林俳人高政の独自性と、これに同調する非点者層の動向に焦点をあてる。高政はほとんど一門を形成せずに、かなりの俳歴や実力を有する非点者層との一座・提携に活路を開こうとしており、そこに貞門から談林化した似船や常矩との明らかな相違がある点を指摘する。この高政に同調するのが友静・如風・春澄・信徳らの非点者の面々であり、彼らがおしなべて、＜季吟俳諧圏＞の一員であった点に注目し、指導者が季吟から高政に替わっただけで、彼らの連携自体は強固さを保持したまま、延宝期後半以後の京都俳壇でもっとも大きな推進力となり、機能し続けてゆくとする。しかも注目すべきことは、友静等に見られるごとく師の季吟らとの関係も解消することなく高政との連携を続けており、こうした融通無碍な動きが非点者層の大きな特色であり、これらの人々によって京都俳壇の談林化が行われたと指摘する。

第2章から第5章までは、季吟門の友静、梅盛門の重尚、重頼門の千之・千春・春澄らのいわゆる非点者たち、つまり遊俳たちの俳諧活動を詳細に述べ、彼らがかたくなに師系にこだわらず＜季吟俳諧圏＞として自由に交流し、高政とも接し、江戸の芭蕉たちとも交流してゆく様相を詳述する。第1章の総論に対する各論ともいえる。また、各自の詳細な俳歴と年譜を付している。

第6章は、春澄が季吟一座の百韻興行に参加していたことを証する書簡で、両者の親しい交流がわかり、また季吟の歌学重視の姿勢もみられる。

第7章は第 部の総論ともいえるべきもので、いわゆる高政の新風俳諧がいかなるものであったかを考察したもの。高政の俳諧に見られるものは、道理を攪乱する意外性の顕著さにその特色があり、貞門流の手法を用いながら「誇張の俳諧」とも言うべき特色を発揮し、それが友静ら非点者層を惹きつけたのだと説き、結局のところ新風という名の加工された旧風にほかならず、貞門流と大差はないと結論づける。その上で尾形仵のごとく貞門と談林の違いを堂上の性格と庶民的性格の対比とする説や、今栄蔵のごとく「技術的方法を異にする点」にありとする説を批判する。

第 部は8章から成り、第1章では、天和期にあつては新風宗因流俳諧も旧派貞門俳諧も古風という点では変わりなく、その点芭蕉は彼らの古びを超えた俳諧の可能性を追求し

ていたことを提示する。延宝9年（1681）5月15日付麁埒宛書簡の「句作のいきやう」5箇条と付合6組の検討により、「親句性」の否定、「句のひゞき」の重視、「想像力」の深化、前句の「位」を重視する付け方が、当時の芭蕉の考えていた俳諧であり、そこに独自性があるとする。

第2章から第6章までは、初期江戸蕉門の撰集を入集俳人や撰集形態や内容から詳細に検討を加えたもので、第5章では芭蕉の『みなしぐり』の跋に対し新説を示している。

第7章は連句の文体を問題にして、たかい頻度で助詞「を」が使用されているのは芭蕉俳諧のみの特色で、それは「目的格を明示し、論理的意味関係をはっきりさせることにより、鮮明なイメージを1句（あるいは2句）に結ぼうとする試みであった」と結論づける。

第8章は、「字余りと破格調」・「漢詩文調」・「閑寂と伊達」の諸点から、『むさしぶり』の発句や連句の付合手法を問題にしたもので、結論としてこれらの特色を認めながらも重要なことは、「深切」にして「遙遠」な情趣の表現化が実現されたことであり、かつ連句においては前句の詞によらずその「位」に着目して付句が展開された点であり、こうしたところに談林の「誇張の俳諧」とは異質の芭蕉俳諧の斬新さがあるのだと説く。

第 部は、井狩友静・小山重尚・望月千之・望月千春・青木春澄の全発句を収録したものである。

以上本論文を要約したが、第 部第1章の説は、京都俳壇の非点者層の動向に焦点をあてて高政との関係に言及したユニークな論を展開しており、大略首肯するに足る。第2章から6章にいたる各論も、それを証するものとして有効である。第7章では、高政の俳風を検討して京都談林俳諧の様相を問題にし、既成の尾形仂や今栄蔵の談林俳諧に対する考えに批判を加えている。しかしながらその批判はあくまでも京都圏内だけであり、談林俳諧を問題にする時に大坂や江戸の様相を無視することは出来ず、京都の高政だけを扱うのは狭く短絡的であると言わねばならない。再考を要しよう。また論者の考えは、板坂元『初期俳諧』（岩波講座「日本文学史」第7巻近世 の内、昭和33年）の論に近い立場を示しているかと思うが、板坂との論点の違いも明らかにすべきであろう。

第 部に関しては、初期蕉風俳諧の様相を撰集の入集者や構成を通し詳細に分析して、その特質が形成されてゆく過程を京都俳壇の非点者層との交流をも絡めながら明らかにしたのは、論者の大きな功績といえよう。またその結論もほぼ妥当なものと思われる。ただその場合、門人其角の立場と芭蕉との関係がどのようなものか、部分的には触れてはいるが必ずしも明確ではない。其角の動向をもう少し明らかにする必要があるだろう。

なお第 部と第 部との関連において、それぞれが独立したまとまりを示しており、両者を結びつける部分に今ひとつ強力な関連性をつけ、総合的な展開を示す必要があったのではないと思われる。以上の指摘は、論者の今後の真摯な研究によって克服されるものと期待する。

ともあれ、延宝・天和期における京都俳壇の高政や<季吟俳諧圈>に属する非点者層の

人々の動向やその俳風、さらに江戸の初期蕉風俳諧の形成と天和期における芭蕉俳諧の特質とを京都の非点者層との交流を絡めて明確に実証したことは、論者の大きな研究成果と言ってよいであろう。

よって本論文は、博士（文学）の学位を授与するに十分ふさわしいものと判定する。

平成16年1月26日

主任審査員	早稲田大学教授 文学博士（早大）雲英末雄
	早稲田大学教授 文学博士（早大）谷脇理史
	早稲田大学教授 文学博士（早大）堀切 実
	早稲田大学教授 博士(文学)早大 中嶋 隆